



by エイムズ 唯子 in Sedona, AZ



春ある キュイジーヌ

題字：小貫 紘子

第4回「酢昆布は『母』の味」の巻

アリゾナ州の州都フェニックスには、アジア系の食料品店が多く、たいがいの日本の食材が手にはいりますが、2011年の3月に友人のアンナがお見舞いに届けてくれた「日高昆布」は、とりわけありがたい日本食でした。アンナは、夫・クリスの親友で、アイヌの集落に住み、人類学の調査をしていましたが、その春はロサンゼルスで論文を書いていた。東日本大震災が発生し、クリスが休暇で高崎からアリゾナに向かう途中、成田空港付近で被曝したと知って心配し、ロサンゼルスから8時間車を飛ばして、私とクリスが滞在していたセドナまで、昆布を届けてくれたのでした。

それから11年経った今年の春、私はセドナの高校で、特別支援の教員として「代数基礎」のクラスのサポートに入っていました。その日の授業は、原発事故を扱った微分方程式の文章題。指数関数的減衰 (exponential decay) の応用問題です。「2011年にフクシマで見られたように、原子力発電所の事故では、ヨウ素131やセシウム137などの放射性物質が環境中に放出され、健康被害を引き起こす。これらの半減期は、ヨウ素131で8日、セシウム137の場合は30年である。仮に、100グラムのセシウム137と、 x グラムのヨウ素131が放出され、40日後の測定で、セシウム137とヨウ素131の量が同一だった場合、事故によって放出されたヨウ素131の総量を求めよ」。

生徒たちはザワザワしています。ザワザワの正体は、「あとこの授業、何分で終わるのかなあ」なのか、「えーっと、どうやって解くんだろう」なのか。気がついた時、私は挙手していました。

「皆さん、聞いてください。私が今ここにいるのは、このフクシマの事故があったからなのです。まだあなたが幼稚園に通っている頃に、遠い日本で起こったことです。私にとっては人生を大きく変える出来事でした。そしてこの問題はまだ続いています。皆さんの原子力発電についての考えは、それぞれだと思う。でも、この問題は、私たち全員が関心を持つべきことではないかな。私はそう思います」。ひとおもいにそう言って座ったとき、ザワザワは止まりました。

アンナが届けてくれた日高昆布は、結び昆布にしておでんに入れたと記憶しています。昆布といえば、フォーラム代表の瀧口典子先生が教えてくださった「酢昆布」は、時々作る懐かしい料理。コピーして下さったレシピは、鹿児島のお母様から、先生の住む高崎へと送られた昆布の小包に、お手紙として同封されていたものようです。昆布にたっぷりの米酢、三温糖と醤油を加えてとろ火で45分、お鍋のそばをはなれないで、4本の長いお箸でよくまぜて、こげつかぬように、煮汁が「したしたに」残るくらいに煮上がったら、白の炒りゴマを振り込みます。私にとって、「もうひとりの母」の味です。